

March 2009

京都大学総合博物館 ニュースレター



「広輿考」から「輿地総図」(部分) *表紙解説は11頁

	2007年春季企画展を振り返る (上杉和央)	2
	十周年記念展に寄せて (山中一郎)	5
研究ノート	金銀平脱双鳳文鏡の非破壊分析 (山田卓司)	7
	2007年度以降の企画展・特別展	11
博物館スタッフ紹介	塩瀬隆之	12
博物館スタッフ紹介	五島敏芳	13
	京都大学研究資源アーカイブ映像ステーションの開設	14
	秋季企画上映展「京都大学総合博物館 学術映像博2009」にむけて	15
	学術映像コンペティション	15
	2009年春季展	16

企画展

2007年春季企画展

『地図出版の四百年 京都・日本・世界』

場 所：京都大学総合博物館 2F 総合展示室・企画展示室
 期 間：平成19年4月4日(水)～5月6日(日)

2007年春季企画展を振り返る

「地図出版の四百年」の歴史

「地図の歴史は文字の歴史よりも古い」。2006年、99歳で御逝去された故織田武雄名誉教授が残された最後の著作『古地図の博物誌』（古今書院、1998）は、このような文言から始まる。学部生時代、同じようなことを何かの授業で聞いた気もする。不肖な学生であったため、どの先生から教わったのかははっきり覚えていないのだが（やや言い訳をすると、機会がある毎に聞いた気がするためはっきりしないということもある）、いずれにせよ私の教わった先生は、織田先生の薫陶を少なからず受けた弟子であったことは間違いない。

織田先生は戦後の地理学教室を支えてこられた先生だが、それ以前も含め、京都大学文学部地理学教室で学んだ研究者からは、数多くの古地図研究が生まれている。その歴史は今年でちょうど百年の節目を迎える。日本で初めての「地理学講座」が京都大学文学部（当時は京都帝国大学文科大学）に設置されたのが、1907年であった。

2007年に展示を行うのであれば、ぜひとも文学部地理学教室と共同で、百年間の分厚い研究史を紐

解き、かつ新たなエッセンスを加えた古地図展示を試みたい。このような思いを胸に、文学部旧陳列館の金田章裕教授の部屋の扉をノックしたのは、2005年12月20日。日付など忘却の彼方なのだが、手元に奇跡的に残っていたメモにそう書いてあるので、おそらくそうなのだろう。

この第1回打ち合わせのなかで、日本で地図が出版されておよそ四百年になることが話題にのぼった。そして、次の2点が確認された結果、2007年の春季企画展のテーマとして出版地図の歴史はふさわしいのではないか、ということになった。

- ①：博物館に収蔵される文学部地理学教室関連古地図資料の多く、すなわち百年間に集められた研究資料の多くは、いわゆる「出版地図」であり、数多くの研究がこれまでになされてきたこと
- ②：その一方で、文学部博物館時代を含めたこれまでの古地図展示では、出版地図と手描き地図を明瞭に意識した展示がなく、「出版地図」の位置づけを明確に提示してきたとは言えないこと

このように、企画展のテーマは「あっさり」と決まり、その直後には世界図・日本図・京都図の3種を中心とした構成とすることも決まった。

このように極めて順調な滑り出しで企画展示案は

進み始めた。しかし、ここからが大変であった。何と言っても四百年の歴史と百年の研究史である。「不惑」にもまだ猶予がたっぷりある私は、どちらを向いても「惑」というなかで、夜な夜な収蔵庫を開けて、うっとり、いやじっくりと古地図を眺める日が続いた。机に向かって論文を読むのは生来苦手なのだが、牛歩戦術並みの速度で古地図史についての勉強も進めていった。

そこに新たなエッセンスを加えることなどできるのだろうか……今思うと、そんな不安を持つ余裕もないほどだった。ただ、古地図を眺めるのは本当に楽しかった。「今の地図はなんで無味乾燥なのに、江戸時代の地図は見ていて飽きないなあ」という思いを抱きつつの毎日を過ごした。

そんなある日、ふと「江戸時代の人、どういう風に地図を見ていたんだろう」と考えてみた。今とは違うことは分かった。もう少し考えてみた。「だって背景の文化が違うしなあ……あれ、これまでの出版地図の議論って、当時の文化と対比させた視点から語られることはあんまりなかったぞ……」。何となくスッキリした瞬間であり、展示の全体像が見えた（気がした）瞬間だった。

このような回り道をして、出版地図を文化史のなかに位置づけてみるという視点に到達した。「回り道」というのは、実はこの視点、第1回打ち合わせで既に確認されていたものだったからである。手描き地図ではなく出版地図である意味、それは特定の政治的・社会的事象に直結する形で作られるのではなく、当時の世相のなかで不特定多数の人に見られ

ることが当初から目的とされていることである。時代ごとの文化——出版文化、観光文化、読書文化、浮世文化といったように細分することもできる——の影響を色濃く受けたのが「出版地図」であることはいわば自明のことだった。少なくとも金田教授の中ではそうだったのだろう。「惑」なる私は、「回り道」をしてそのことがようやく腑に落ちたのである。

その後はやや歩みを早めつつ、展示案と図録の作成を行っていった。とくに「図録を展示期間よりも前に完成させる」という無謀な(?)目標を立てていたので、牛歩ならぬ「牛走り」をせねばならないようになった。図録については、そこに担当編集者からの絶妙な手綱さばきと鞭さばきがあったことは言うまでもない。その結果、3月末には図録が完成するという快挙(!)を達成し、展示も何とか間に合うことができた。

このような「歴史」をたどり、「地図出版の四百年」は作られていったのである。

「地図出版の四百年」の隠し味

展示された地図それぞれについては、図録を見れば理解していただければと思う。ここでは、地図以外の展示について触れておきたい。これらは、「地図出版の四百年」をまとめるために不可欠な隠し味的な存在であった。

・版木

「出版地図」には、木版・銅版・石版など多様な



写真1 展示風景



写真2 京都の「むかし」と「いま」を比較する

印刷方法があったが、江戸時代の出版地図の多くは木版であった。そのことは、誰でも知っている常識に属することであるが、その「版木」を実際に見たことがあるのは、研究者でも限られていた。今回の展示では、江戸時代の奈良の代表的版元「大仏前 絵図屋庄八」が用いた版木を、子孫に当たる筒井正夫氏の御厚意によりお借りすることができた。桜の古木を用いた重厚な版木に、わずか1mm程度の凹凸で繊細な文字や地形が巧に表現されている。出版地図をみていくと、時代を経るごとに刷られた線が細くなっていくことが分かる。今回お借りした版木からは、その最高峰に位置するような「技」を認めることができた。

・デジタル化による江戸・大正・現在の京都

今回の展示では、貞享3年（1686）『新撰増補京大絵図』と大正11年（1922）頃『京都市都市計画図』を、画面上で自由に閲覧できるシステムを作った。さらに、別画面では、該当する部分の現在の場所をgoogle mapで表示できるようにもした。システム開発にあたっては株式会社日立製作所試作開発センターの協力を得た。

このシステムは、「地図出版の四百年」のもっとも新しい時代においては、地図が「出版」という形態から分離しつつあることを表現するため、また最先端の研究手法のひとつがデジタル画像を用いたものであることを表現するためのものであった。ただし、そのような「講釈」は展示には掲げず、ただ観覧者を楽しんでもらえるシステムにすることを心がけた。

地図の展示は「遠くて細部が見えない」というのが難点であった。それが解消できるひとつの展示方法としても好評であったように思う。

・和室

地図の展示、とりわけ都市図の展示のもうひとつの難点は「文字がいろんな方向を向いていて読みにくい」というものであった。これは壁面に展示する現行の展示室では解決されないものであった。常設展示の際も、観覧者から何度も苦情が来ていた。「たたみに置いて見ていたことを想像してみてください」というと納得してもらえるのだが、逆に言うと、

そのような想像をしてもらえないような展示をしていたことになる。

この点を反省し、また出版地図を当時の文化に位置づけるといふ企画展示の目的を達成するため、今回は別室に簡易の和室を再現し、レプリカを置いて、江戸時代の人々の地図の見方を追体験してもらうよう試みた。

展示期間中、地図の大きさにビックリしながら追体験を楽しんでくれる観覧者が数多くいたのは、とても喜ばしいことであった。



写真3 出版地図の折り畳み方を追体験！

最後に、展示にあたってご協力いただいた数多くの皆さまに、改めてお礼を述べたい。どうか企画展を開催することができたのも、周囲のサポートなくては無理なことであった。このような方々に満足がいく展示内容であったか、そこだけが心配である。

京都府立大学文学部講師（元京都大学総合博物館助教）・上杉和央

特別展

京都大学総合博物館創設十周年記念展

『京大の至宝——蘇る宝たち——』

場 所：京都大学総合博物館本館2階展示室
期 間：平成19年6月6日(水)～7月8日(日)

十周年記念展に寄せて

当博物館は、京都大学が積み重ねてきた多方面の研究によって、結果として集積した標本、すなわち文化史に関係する史・資料、自然史系標本、技術史系標本を一堂にまとめて、大学内外の研究や教育への活用を支援することを第一の目標にしています。それとともに、京都大学で今進められている研究やその成果を広く一般のみなさまに知っていただくための広報活動も強く意識しています。さらには、大学教育への寄与のみならず、生涯学習教育や高等学校、中学校そして小学校の学校教育に関わる活動をも企画し、関係される方々の参加をいただてきました。また「博物館の3要素」のひとつを構成する展示活動では、「展示とは何か」という初源的命題に立ち返って、「空間に美術作品を創作することで、取り上げる分野の学問の基本的な考え方を示す試み」を模索する挑戦を続けてきました。ご理解いただきたい主張を展示物の美しい空間配置で示すことを求めてきました。たとえば展示物にあわせたケースを作り、それらを展示場の空間に個別の位置をとって置く試みをしたこともありました。このように当博物館は、博物館の果たすべき今日的課題に関わる多方面の活動をしてきました。しかも、最少の人員と、最小の経費をつねに意識しつつ、すなわち経済的合理性を考慮して追求してきました。

しかしこの一面とやや趣を異にする活動もあります。標本および史・資料の管理・維持は、必要とされる経費を節約する性質のものではありません。その活動はきわめて高い専門知識を要することは言うまでもありませんが、日々に進歩する「保存処理」の技術ともあいまって、標本の利用形態に対応する処置が講じられねばなりません。研究・教育の支援活動だけではなく、当博物館の諸活動を支えてくださるみなさま方に広く還元するべく公開が求められるのが最近では当然のことになりました。「使えば減る」という当たり前のことを前提としつつも、多様な使用を「減り」を少なくしながら果たす「知恵」を求めてきたということですが、そのような作業のひとつが収蔵物の「修復・保存処理」であります。とくに日本史史料ならびに考古資料には、文化財保護法による「国宝」・「重要文化財」に指定された標本が12件存在し、その管理・維持に努力することが強く求められる昨今の趨勢にも支えられています。創設十周年を記念して、この一面の作業で蘇った「宝たち」を見ていただくことにしました。個々の展示物に関わる研究を示すものではありません。個々の展示物を説明しようと意図するものではありません。わたしたちの標本管理の姿勢と、そのための絶えざる努力をご理解いただきたいのです。

そのうえで新たに「見つけ出した」標本の一例として「シーラカンス第1号標本の鱗」をも展示しました。この「原始的な姿」をもつサカナが最初に獲れたときの、その標本の一部が京都大学に「眠って」いたのでした。学術的に記念すべき、かつ貴重な標本です。そしてまた、この展示を企画しているあいだにも、当博物館に保管される標本の研究は絶えず続けられていることを証しする発表がありました。これまでの研究からは思いもしなかった結論が一般紙に大きく報道されたのです。

京都市山科区西野山岩ヶ谷町にある「西野山古墓」は1919（大正8）年に発見され、その出土品は1934（昭和9）年に京都帝国大学文学部に寄贈され、1953（昭和28）年に一括して「国宝」に指定されていました。多くの鉄製品が含まれますので、その劣化が著しく、関係者は頭を痛めていました。その現状に鑑みて、京都大学は「保存処理」を施すことにしました。そしてその成果を公開するべくこの度の展示を準備していましたところ、山科に関連する古代文献史料を検討されていた研究者が、「西野山古墓は坂上田村麻呂の墓であった」と結論されたのです。一般的に言って、考古資料にその年代を与えることはきわめて難しいのですが、この古墓は811年に造営されたと考えることを可能にしてくれました。他に比較すべき資料が見られないほどの傑出した副

葬品をもつ特殊な墓ですが、811年の造墓年代を与えても、現代の知見に矛盾するところはありません。発見当時からすれば、太刀、鏡、硯といった考古資料の研究は格段に進展し、それらの与える年代観から総合的に考えても矛盾しないのです。ただ「保存処理」には金属製品を優先させましたので、土製品が未処理で残ってしまいました（写真1参照）。早急に補強措置を施す必要があります。

そのほかに「修復」作業によって蘇った品々も並べてみました。すでに昨年の2月に「修復お披露目」を果たしていますが、「マリア十五玄義図」もみなさまの強い要望に応じて展示しました。秀忠の書状は、歴史にかくも名を知られる人物の直筆です。地図資料はポルトラーノ（海図）を異なる仕方で修復した例の比較対照展示を試みました。さらにオランダのファルクの作を模倣したと考えられる地球儀（写真2参照）は、その難しかった修復作業の過程が理解できるように示しました。

まさに創設十周年を記念するに相応しい展示となったと思っています。関係諸氏のご援助、ご努力のおかげでございます。深くお礼申し上げます。

（京都大学総合博物館・資料基礎調査系・

教授 山中一郎）

〈原稿受理：2007年7月13日〉



写真1 西野山古墓（9世紀初頭）出土の陶製品

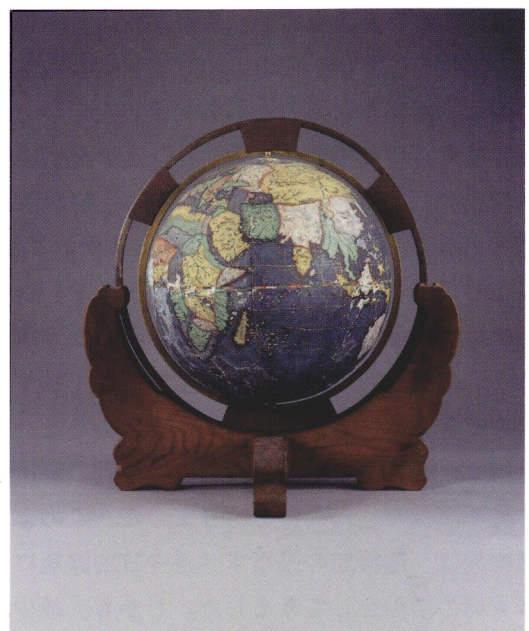


写真2 オランダ人ファルクの作を日本で模倣したという地球儀（18世紀か？）

研究ノート

金銀平脱双鳳文鏡の非破壊分析

1. はじめに

金銀平脱双鳳文鏡^{注1}は、1919（大正8）年、現在の京都市山科区西野山岩ヶ谷町にある古墓から埋葬当時の状態で発見されています。同時に出土した金装大刀等の出土品と共に1953年国宝に指定され、現在は京都大学総合博物館に所蔵されています。文様の剥落や脆弱化は起こっていますが、正倉院御物の類例と同様に、貴重な鏡の一つといえます。博物館創設10周年を記念し開かれた「京大の至宝—蘇る宝たち」展での公開に先立ち、保存処理（修理）を（財）元興寺文化財研究所が行っています。以下では、金銀平脱双鳳文鏡の分析から得られた知見を報告します。金銀平脱双鳳文鏡の鏡背文様周囲の付着物や文様の材質を中心に分析しています。そこで得られた分析結果等を基にし、保存処理方針が決定されています。

2. 分析方法

まず、綿棒により拭き取った成分^{注2}を蛍光X線分析（以下、XRF）^{注3}と赤外分光光度分析（以下、FT-IR）^{注4}し、付着物の除去が必要な範囲を検討します。また、鏡背の文様部を中心に31箇所をXRFにて測定しています。

3. 分析結果

3-1. 拭き取り結果（図1）

拭き取った成分のXRF結果は、全箇所ですべてアルミニウム（Al）、ケイ素（Si）、リン（P）、カリウム（K）、

カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）、銅（Cu）を検出しています。同様な測定結果を示しているため、1箇所のみXRFスペクトルを掲載しています（図2）。

拭き取った成分のFT-IR結果は、3つのグループに分類できます。グループ1は、1650と1280 cm^{-1} に吸収を持ち、グループ2は特徴的な吸収を持たず、グループ3は1730と1620 cm^{-1} に吸収を持っています（図3）。

3-2. 鏡背のXRF結果（図4）

全箇所ですべて銅とスズ（Sn）を検出しています。各箇所では、銀を検出するところ、金・銀を検出するところ及び金・銀を検出しないところに分かれます。微量成分として、カルシウム、チタン、クロム（Cr）、鉄、ヒ素（As）、アンチモン（Sb）、水銀（Hg）を検出しています。測定結果は、代表的なスペクトルを掲載しています（図5）。

4. 考察

4-1. 拭き取った成分について

拭き取った成分のXRF結果より、鏡背の全面に銅錆、銅の酸化被膜や土壌成分が付着していると考えられます。

FT-IRより、文様周囲に見られる付着物であるグループ1は、植物系接着剤と考えられます。グループ2は、銅錆、銅の酸化被膜や土壌成分のみと考えられます。グループ3は、漆の特徴的なピークを示し、劣化し粉状となった漆が検出されたものと考えられます。なお、1000 cm^{-1} の強いピークは、銅、土壌成分や綿棒由来と考えられます。

グループ1の接着剤は、出土後文様がはがれることを防ぐ目的で塗られた可能性が高く、除去可能ですが、文様を傷める恐れがあるため、完全には除去せず、一部を残しています。グループ3も、銅錆や土壌成分の除去と同時に文様を傷める恐れがあります。そのため、今回保存処理のクリーニング作業は、グループ2を中心に行い、金や銀の輝きを取り戻すためでなく、防錆や装飾保護を主とした現状維持を最優先とする方針で行われています。

4-2. 鏡背の文様について

青銅の構成成分である銅とスズを検出し、金、銀の文様及び漆（少量の採取が必要なため断定できないが、拭き取りグループ3の結果から漆と推定される）部分を確認しました。また、残存する文様部の多くは銀であることが分かりました。なお、検出されたカルシウム、チタン、クロムと鉄は土壌由来の、ヒ素、アンチモンと鉛は青銅由来の微量成分と考えられます。

XRF測定箇所1, 2, 3, 5, 6, 7, 9, 12, 18, 21, 22, 30, 31でわずかに水銀を検出しましたが、技法については明らかにできていません。

5. まとめ

金銀平脱双鳳文鏡の分析を通して、鏡背文様部周囲の接着剤と文様の材質を確認し、保存処理における基礎的なデータとして役立てています。非破壊分析に限定され、早計な知見部分もあるかもしれませんが、新たな分析技術の進展と共に、より一層の解明を今後の課題にしたいと思います。

注1 平脱とは、金や銀等の薄板を文様に切って漆面にはり、漆で塗り埋めてから、その部分を再び研ぎ出す技法のこと（大辞林 第2版 三省堂より）

注2 付着物の除去可能な範囲を決定するため、除去作業に先立ち、エタノールで湿らせた綿棒により鏡背の表面10箇所を拭き取っています。なお、綿棒のXRF結果に特徴的なピークがないことを確認し、FT-IRでは、各測定結果から綿棒の特徴的な吸収を差し引き、拭き取った成分の測定結

果を得ています。

注3 エネルギー分散型蛍光X線分析装置（装置：セイコーインスツルメンツ(株)SEA5230・モリブデン（Mo）管球・1.8mm コリメータ径・管電圧（大気下45kV/真空中15kV））

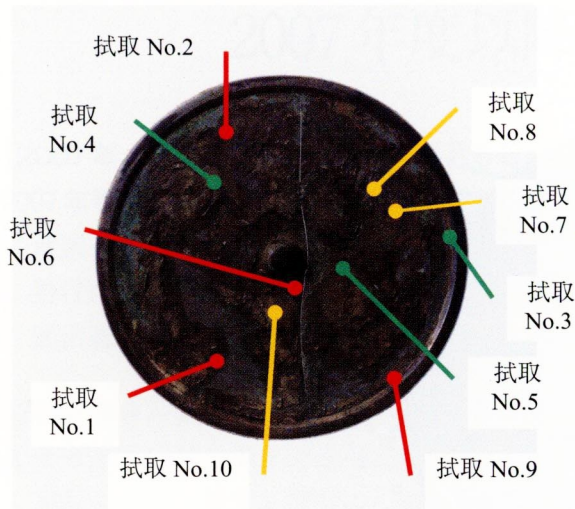
試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出し、元素を同定する。一般に金属材質の同定は大気下で測定を行い、土壌成分などのカルシウムより軽い元素の同定では、真空中で測定を行う。

注4 全反射吸収測定・フーリエ変換型赤外分光光度計（装置：SENSIR TECHNOLOGIES Travel IR）赤外線を試料に照射することにより得られる、分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定する。

（財団法人 元興寺文化財研究所・

保存科学研究室・山田卓司）

〈原稿受理：2007年9月4日〉



グループ1 (赤色) : 1650, 1280 cm^{-1} (接着剤の可能性)
 グループ2 (緑色) : 1000 cm^{-1} (銅錆や土壌成分の可能性)
 グループ3 (黄色) : 1730, 1620 cm^{-1} (漆の可能性)

図1 拭き取り箇所とFT-IR結果より推定される材質

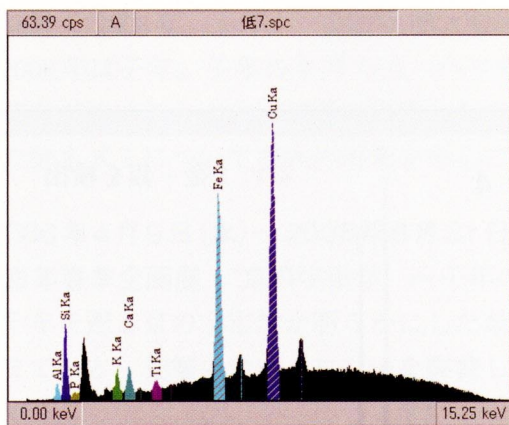


図2 拭き取った成分のXRFスペクトル
 測定条件：真空中15kV
 縦軸：XRF強度/cps
 横軸：エネルギー/keV

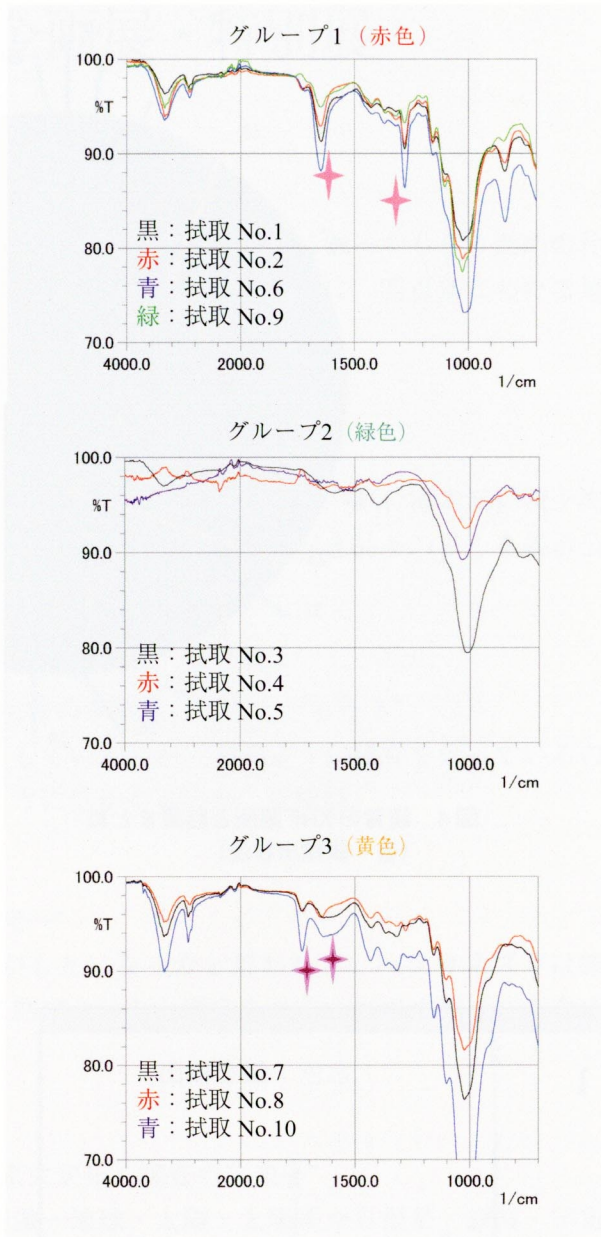


図3 拭き取った成分のFT-IR結果
 (各測定結果は、綿棒のIRスペクトルを差し引いたものを記載している。)
 縦軸：透過率/%
 横軸：波数/ cm^{-1}

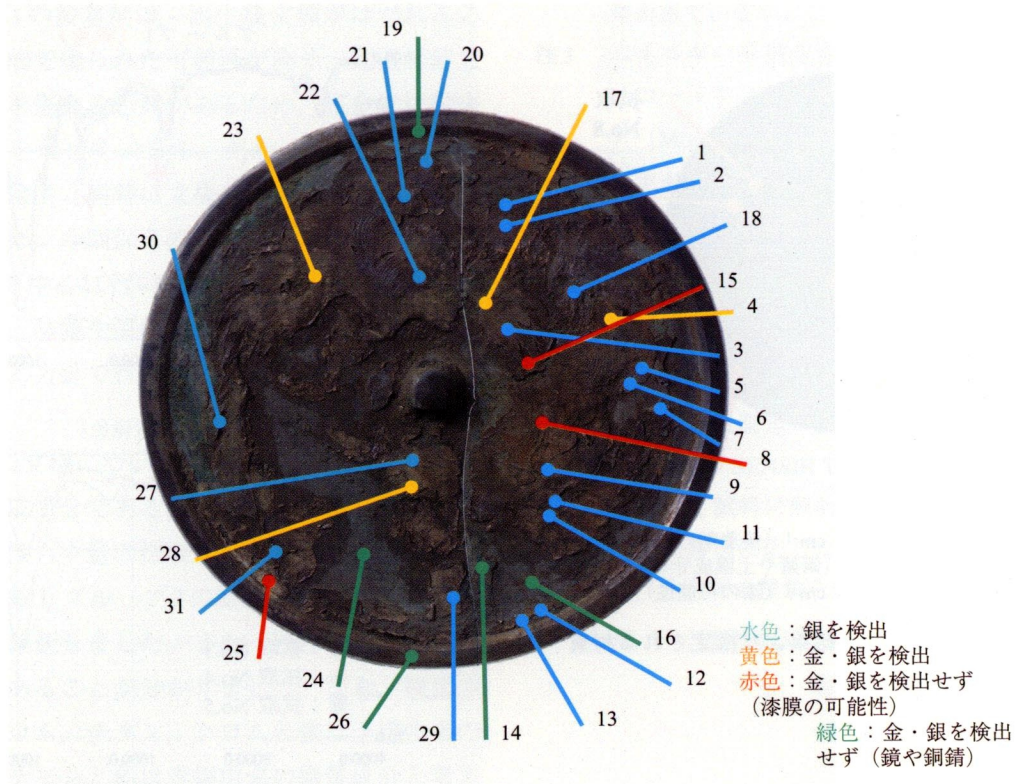


図4 鏡背のXRF箇所と結果まとめ
 (金・銀検出状況)

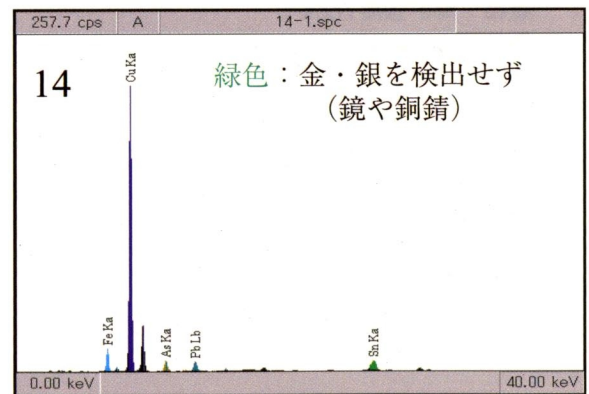
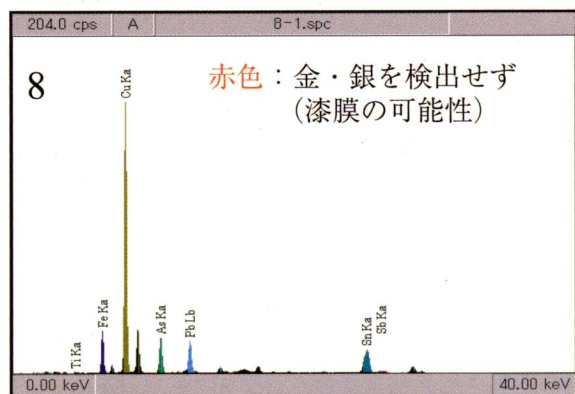
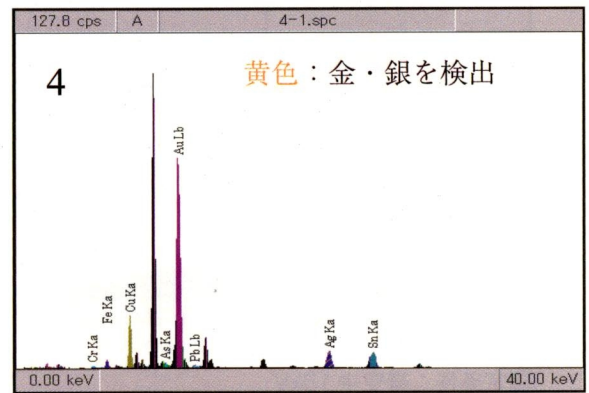
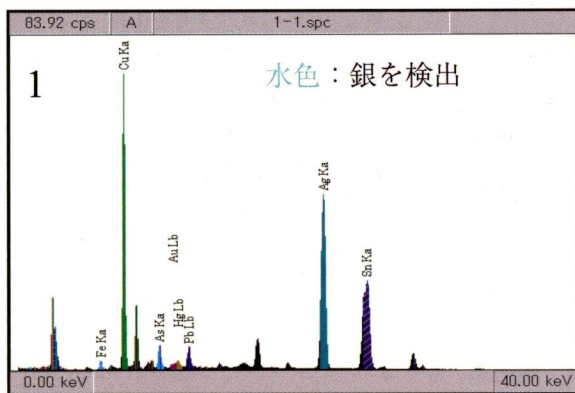


図5 XRF スペクトル (測定箇所 1, 4, 8, 14)
 測定条件：大気下 45kV 縦軸：XRF 強度 /cps 横軸：エネルギー /keV

2007年度以降の企画展・特別展

[2007年4月4日(水)―2007年5月6日(日)]

2007年春季企画展：“地図出版の四百年―京都・日本・世界”

地図を刷り、地図を売る。そこには、分かりやすさと奇抜さ、そして手にとってもらうための仕掛けがあった。京都大学が所蔵する貴重な京都図・日本図・世界図を中心に、四百年にわたる地図出版の創意と工夫をとらえた。

[2007年6月6日(水)―2007年7月8日(日)]

総合博物館創設十周年記念特別展 “京大の至宝―蘇る宝たち―”

京都大学は、教育・研究のために保管品の保存修復処理に力を注いできた。総合博物館創設十周年を記念して、すでに保存修復処理を施した「京都大学の宝」ともいうべき品々の多くを展示公開。

[2007年8月1日(水)―2007年12月2日(日)]

2007年秋季企画展：“生態学が語る不思議な世界―生物の多様性ってなんだろう？”

生態学者が生物多様性をどのように理解しようとしているのか、どのように研究を行っているのか、それは環境問題やわたしたちの生活にどのように活かせるのか、を解説。

[2007年12月19日(水)―2008年3月16日(日)]

特別展：“2008年 子年 ―京都大学と野ネズミ研究―”

2008年は子年。子年のネズミは、ハツカネズミがもとになったと思われる。ハツカネズミは繁殖力が強いことから、繁栄の象徴として、干支に結びついたと考えられる。ハツカネズミを含めた野ネズミについて京大の研究を中心に紹介。

[2008年4月9日(水)―2008年8月31日(日)]

2008年春季企画展：“京の宇宙学 ―千年の伝統と京大が拓く探査の未来―”

千年を遡る京の宇宙学が明らかにした最新の宇宙像―地球・太陽・太陽系から恒星・銀河・宇宙まで―と、先端のテクノロジーを駆使した宇宙探査の現状と未来など、京大の宇宙学のすべてを紹介。

[2008年10月1日(水)―2008年12月27日(土)]

2008年秋季企画展：“シルクロード発掘70年―雲岡石窟からガンダーラまで―”

京都大学では、人文科学研究所を中心に、仏教文化の源流を求めて、シルクロードの東西に位置する雲岡石窟とガンダーラ寺院址を70年にわたって調査してきた。この70年をふりかえるとともに、調査で収集してきた文物をはじめて一般公開。

〈表紙解説〉「広輿考」(万暦39年〈1611〉版)

中国本土と朝鮮・日本など周辺地域までを含む大部の地図帳。地図に解説を付しているのが特徴。中国明代に刊行された。朝鮮の画帳や地図帳に一般的な装丁がほどこされ、装丁から伝来の経路(中国→朝鮮→日本)がわかる珍しい事例である。総合博物館の蔵する勸修寺家文書のコレクションの一つ。

博物館スタッフ紹介

塩瀬 隆之



2008年11月に情報発信系 准教授に着任した塩瀬隆之です。京都大学工学研究科で学位を取得し、2008年10月まで京都大学情報学研究科に在籍しておりました。技や技術を次世代に継承する方法を機械工学、情報学、認知科学、質的心理学など多方面から研究をしています。ほかにも(1)ロボットと人がおしゃべりするような雑談コミュニケーション、(2)視覚に障害のある人と絵画について言葉で語る美術鑑賞コミュニケーション、(3)黙して語らないけれど技が伝わる師匠と弟子の技能継承コミュニケーション、(4)医療や看護、リハビリ分野における医学コミュニケーションなどなど、いろいろなコミュニケーション研究に取り組んでいます。

総合博物館に異動することを希望した大きな理由の一つは、技術史資料の充実を図ることです。本学総合博物館は、文化史系と自然史系の充実した学術標本群に比して、技術史系資料の収蔵が十分とはいえません。京都帝国大学創立時より歴史を共にする機械工学や土木工学など工学部はもとより、医学部、農学部、理学部など多くの学部学科に、科学技術分野に果たした京都大学の功績を代表する技術史資料群がまだまだその正当な価値を見出されていないものが数多くあります。それらにしっかりと光をあて、文化史系や自然史系とならび3本目の柱として総合博物館のミッションに貢献することが使命であると考えています。

もう一つの理由はアウトリーチコミュニケーションのさらなる展開です。これまでにも、市民と科学者とが相互に交流できるサイエンスコミュニケーションやデザインワークショップを通じたユーザーとデザイナーの交流など、数多くのアウトリーチ活動を実施してきました。さらに大学と社会の相互交流を活性化しようと思ったとき、そこにより大きなはっきりとした窓口が必要であると考えていました。総合博物館は学内外からみても、はっきりとその大学と社会をつなぐ窓口として多くの期待を集め、それに応えてきたところだと思います。自らがその窓口以身を置くことで、その役割、機能をさらに充実させることができたらどんなに楽しいだろうと考えました。

大学が社会に果たすべき役割、それは「知の探求、収集、研鑽、伝承」のすべてを包括することだと思っています。そして、大学博物館はその知に対する取り組みのすべて、大学の姿勢そのものを広く社会に指し示す窓口の役割を果たすことができると考えています。そしてその役割の一助を担うことができれば本望です。

どうぞよろしく申し上げます。

博物館スタッフ紹介

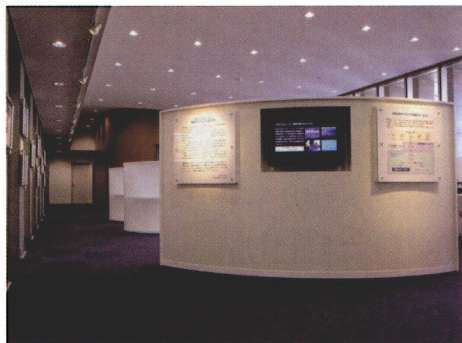
五島 敏芳

2008年12月1日より「京都大学研究資源アーカイブ」担当職員として採用されました五島敏芳です。これまで大学共同利用機関法人人間文化研究機構国文学研究資料館に所属し、旧「史料館」収蔵歴史資料の管理・研究に従事してきました。旧「史料館」は、国会請願により1951年に設置された文部省大学学術局史料館（通称「文部省史料館」）に淵源をもち、1972年の国文学研究資料館設置にともない同館へ置かれた国文学研究資料館史料館（通称「国立史料館」）のことで、2004年の国立大学等の法人化にともない改組・消滅した機関です。その最後の史料館員の一人です。50年以上にわたり収集・蓄積された約50万点（約650コレクション）の収蔵資料の情報のデータベース化や検索システム構築を専門に担当していました。

「アーカイブズ archives」とは、永久保存する価値のある、現在使われていない（非現用）記録のことです。文書館という機関や施設・設備のことも指します。典型的には、旧史料館のコレクションや、本学で言えば大学文書館で保存される事務書類（法人文書）をあげることができます。しかし実は、アーカイブズには、もっと多種多様な内容が含まれます。その一つの範囲に、研究者や研究組織の書類・記録があります。それら書類・記録のなかには、研究者間でやりとりした手紙もあれば、計測・観測の直接のデータもあれば、実験の装置まで含まれることもあります。これらの研究の一次資料は、研究成果としてまとめられる論文や図書等に比べると、あまり大切にされてこなかったようにおもえます。研究を進めている当の本人たちにとって、終わってしまった研究のデータは、さほど重要ではないかもしれませんが、けれどその中には、もしかすると、当人たちの活動とは無関係ながら当人たち以外にとって重要な内容が含まれているかもしれませんし、以前の研究の試行錯誤の過程を把握するのに必要な情報が含まれているかもしれません。いわば宝箱のようなものです。ただ、その宝箱の中身は、それが当時の本物であることの証拠を失わないよう慎重に取り扱いつつ、どんなものが入っているのかを調べ、概要をつかんでおかなければ、当人たち以外の人たちが使うことはできません。また、時間を経なければいられないほど、使ったら傷んでしまうかもしれないので、傷まないような手当ても必要です。宝箱のなかの資料を現在の人も未来の人も等しく使えるように管理する専門家が、「アーキビスト archivist」です。

京都大学は、この研究の一次資料を再活用できる資源とすべく「研究資源アーカイブ」を構想しています。「アーカイブ」という単数形の表現からは、（数えられない）デジタル世界での再活用を意識しています。大学文書館ではなく総合博物館が中心となる理由は、研究の一次資料の現実のかたちが多種多様な物体であるかもしれないからです。総合博物館には、学術標本という三次元物体の管理の実績があります。これからは、三次元物体だけではなく、それに関わる教育研究の書類・記録をも知の証拠として、一体的に保存しなければなりません。そのためのアーキビストとして、史料館員だった経験をいかして、尽力していくつもりです。どうぞよろしくお願いいたします。

京都大学研究資源アーカイブ映像ステーションの開設



2008年10月31日、京都大学稲盛財団記念館の完成を記念して竣工披露会が行われ、本学の保有する貴重な教育・研究活動の資料をデジタル化されたかたちで閲覧できる「研究資源アーカイブ映像ステーション」が設置されました。(翌日より一般公開)

研究資源アーカイブ映像ステーションは、全学的協力のもと総合博物館により運営されています。

URL: <http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/avs/>

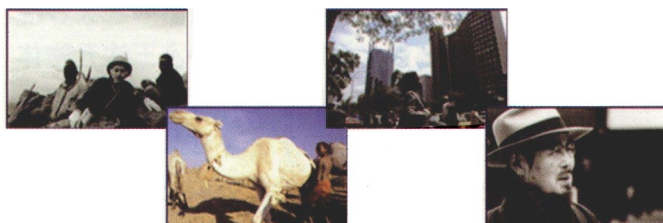
(利用案内)



研究資源アーカイブ映像ステーションでは京都大学教員が企画し、自身であるいは大学院生らとともに制作した映像番組を個人閲覧用ブースで自由にご覧いただけます。また、1950年代に京都大学が派遣した学術探検隊や登山隊の記録映画である『カラコルム』(日本映画新社製作, 1956年), 『花嫁の峰 チョゴリザ』(日本映画新社製作, 1959年)の2作品を、映写コーナーで常時上映しています。

(提供番組・抄)

アフリカへの道／アフリカ類人猿研究史／中央アフリカの森の民／アフリカでの古人類学調査／東アフリカ乾燥地域の牧畜社会／アフリカ農耕民の世界—ミオンボ林の農耕／アフリカ都市研究の歩み／動きつづける大陸／道は、ひらける—石井米雄の東南アジア研究／三角縁神獣鏡／征夷大将軍 坂上田村麻呂の墓／無の哲人、禅の思想から日本哲学へ：西田幾多郎／創造的人間、東洋的思想から理論物理学へ：湯川秀樹／湯川秀樹—その人—



【所在地】〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町
京都大学稲盛財団記念館1階

【開館時間】10時～16時

【入場料】無料

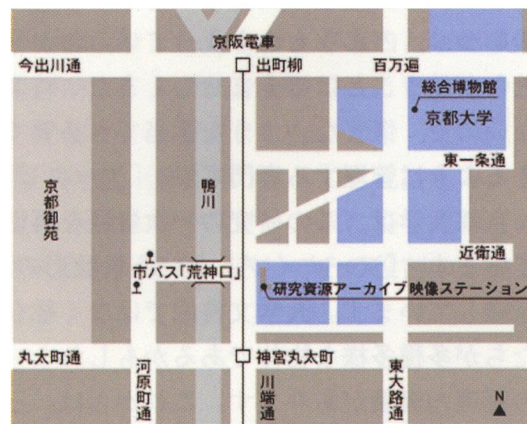
【休館日】日曜日・月曜日・祝日、京都大学創立記念日(6月18日)、年末年始(12月28日～1月4日)

【問い合わせ先】

京都大学 総合博物館 事務室

(TEL)075-753-3272 / (FAX)075-753-3277

(E-mail) info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp



「京都賞ライブラリー」も、どうぞご覧ください。

映像ステーションは、京都賞ライブラリーの奥にあります。

注) 館内でのカメラ撮影、携帯電話の使用、飲食、喫煙は、ご遠慮ください。



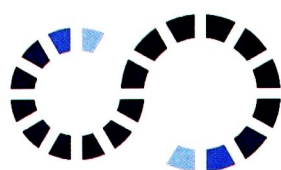
〈秋季企画上映展 「京都大学総合博物館 学術映像博2009」にむけて〉

映像はその誕生以来、文字を中心とする学術の場において、宇宙や自然、生命をめぐる、人間の眼には見えない諸事象を可視化し記録・再現することで、学術の発展を支えてきました。また、近年の急速な技術的進歩を背景として、映像はコミュニケーションや表現手段としても学術研究を新たな展開に導いていこうとしています。また、専門分化されたかたちで蓄積されている学術成果を、映像が媒介することで、他分野の研究者のあいだで共有し、さらには学術領域を超えて社会全体で共有することで、学術の可能性は広がり続けています。

企画上映展示では、期間中、大型の映写スペースを設け、出会う機会の少ない野生動物や海中生物に迫った映像、世界中の文化をとらえた映像、宇宙や人体のさまざまな姿を映し出す映像など、京都大学の研究者たちが持っているさまざまな学術分野の貴重な映像を上映します。上映だけではなく、映像を活用した研究者の実践として、映像に関連するトークイベントやワークショップなど、バラエティ豊かな催しも数多く実施します。また、映像をキーワードに展開される、パネルなどの展示スペース、体験型の映写スペースなども設けます。さらに、企画上映展示の後半には、連動企画である「学術映像コンペティション」で国内外から広く公募する映像の上映を予定しています（※詳細は下段〈学術映像コンペティション〉をご覧ください）。

本企画上映展示を通じて、映像という、わたしたちの目の前に広がる無限の可能性をもつもうひとつの「世界」を、学術のもつ科学性・客観性を手がかりに旅することができるのではないのでしょうか。映像を通じて学術がより多くの人々に共有されることで、学術が人間の未来へとつながるものになることを期待しています。

来館者の皆様に学術映像の新たな面白さを体感していただけるような秋季企画上映展「京都大学総合博物館学術映像博2009」にどうぞご期待下さい。



Kyoto University Museum
Academic Film Expo 2009

〈学術映像コンペティション〉

映像は従来から記録性や再現性、肉眼では困難な諸事象を捉える超視覚性によって、学術研究の可能性を広げ続けていますが、その表現力から学術研究を一般社会にひらき、学術と人々をつなげるメディアとしての役割も見直されています。また、映像は他分野の研究者どうしが研究成果を伝え合うのにも効果的で、細分化した学術分野をつなげ、新たな学術成果を開拓するメディアとしても注目されています。こうした状況を受けて、学術映像コンペティション実行委員会が作られ、総合的な「学術映像」のコンペティションを実施します。この試み自体が、新たな学術的価値を創出することでしょう。また、入選作品を京都大学総合博物館で上映できるよう展示企画委員会よりお願いしています。文理の境界を越えた学術の発展に寄与するあらゆるジャンルの映像を上映できることを期待しています。博物館での上映が実現すれば、これらは、京都の映画文化に「学術映像」という新たな映像文化をもたらすことで、地域文化の発展にも寄与することでしょう。

平成21年春季企画展「交錯する文化」

○展示の概要

文化は、時を超え、地域を越えて、つねに移動し、影響を与えあっています。進んだ文化はしばしば模倣という手段で吸収されますが、学びとろうとする側には、そのまま受け入れることへの反発が生まれる場合があります。このようなある種の葛藤を経て受容した文化を、自らの社会の中で熟成させ、独自に発展させたとき、その転成した文化とはいったい誰のものなのでしょう。

古くから受け継がれてきた文化財の中には、文化の伝わるその瞬間を生き生きとつし出すものが数多く存在します。本展示では、おもに京都大学の収蔵する文化財の中から、新しい文化の受容が引き起こした反応の痕跡を残す文化財を選び、展示します。

この展示が、文化とは何か、という根源的な問いを考えるきっかけになれば幸いです。

○開催期間：2009年4月8日(水)～2009年5月10日(日)

○開館時間：9時30分～16時30分(入場は16時まで)

○休館日：月曜・火曜(平日・祝日にかかわらず)

○入場料：一般400円 大学生・高校生300円 中学生・小学生200円

・20名以上団体割引あり・70歳以上の方・身体障害者手帳をお持ちの方は無料

○京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

TEL (075)753-3272 <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>

○交通機関

市バス JR/近鉄京都駅から17・206系統、阪急河原町駅から3・17・31・201系統、地下鉄烏丸線今出川駅から201・203系統、地下鉄東西線東山駅から31・201・206系統、「百万遍(ひゃくまんべん)」下車徒歩約1分

京阪「出町柳(でまちやなぎ)」駅下車徒歩約15分

*駐車場がありませんので、公共交通機関をご利用ください。

○展示解説

毎週土・日・祝日11:00-、14:00-、15:00-の3回(各40分程度)

申込不要です。直接ご来館ください。



発行日2009年3月31日発行

編集・発行 京都大学総合博物館
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
電話 075-753-3272, 3274
FAX 075-753-3277

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>